

# 廣池千九郎の自然観とその現代的意義

——科学と宗教の対話、そして調和へ——

竹中 信介

## 目次

はじめに

一 廣池千九郎の倫理・道徳思想における自然観の位置づけ

二 廣池千九郎の事跡と思想に見る自然観とその現代的意義

三 『道徳科学の論文』に見る超越的存在と自然と人間の関係性  
おわりに

はじめに

十七世紀の「科学革命 (scientific revolution)」が、近代文明 (modern civilization) と現代文明 (post-modern civilization) の形成に大きな影響を与え、我々人類の生活にもたらした果実は計り知れない。しかしながら、その一方で、十七世紀の時点では想像もできなかった空間的・時間的な規模で、我々人類に対

して、解決困難な問題を突き付けているのも事実である。その代表的な問題が「地球環境問題 (global environmental problems)」<sup>(1)</sup>であり、人類共通の課題として肥大化している現在、その形而上学的源泉としての「自然観 (view of nature)」の再検討や再構築という課題と対峙しなくてはならない段階に入っている。本稿では、科学と宗教の両面から「自然」にアプローチする立場を重視する。

その手がかりとして、本稿で着目するのは、科学と宗教の調和を志向した廣池千九郎 (一八六六—一九三八) と廣池が提唱した「モラロジー (Morality)」の自然観である。まず、廣池及びモラロジーの自然観が極めて広範囲に及ぶものを対象とすることを指摘しておきたい。先行研究では、その自然観には、「自然 (界)」、「神 (本体)」、「宇宙」の内容、「自然の法則」、

「天地自然の法則」、「宇宙自然の法則」、「神の心」、そして「慈  
悲寛大自己反省」という人間の精神作用、あるいは動物と人間  
と自然・神・宇宙の相互関係、生命の連絡の事実、連帯の事実  
と問題、相互扶助、万物生成化育の働き、生存競争、進化論的  
思想等が包含されている。<sup>2)</sup>

本稿では、廣池及びモラロジーの自然観としては、その対象  
を特に地球環境問題に直接的に関係する「山川草木」あるいは  
「森羅万象」を意味する「自然」との関わりに限定し、それに  
廣池の事跡と思想の検討を加えて考察したい。事跡面では廣池  
の自然観が最もよく具現化されている「谷川講堂建設時のエピ  
ソード」を、思想面に関してはモラロジーの中心的原典である  
『道徳科学の論文』<sup>3)</sup>を取り上げることとする。前者の選定理由  
は、谷川講堂の建設時に廣池が実地に、谷川岳の大自然との関  
わりの中で、門人に対して数多くの教訓を残しているため、廣  
池の自然観が比較的把握しやすいからである。後者のそれは、  
『道徳科学の論文』が廣池の倫理・道徳思想を最も体系的に示  
した書物で、モラロジーの全体像が把握できると考えられるか  
らである。

廣池の提唱したモラロジーにおける中心的な主張は、「最高  
道徳 (Supreme Morality)」の理解と実行の必要性である。そ  
の最高道徳の特色は、「因習的道徳・普通道徳 (traditional or  
conventional morality, common morality)」と一線を画する

「(宇宙根本唯一の) 神 (the basis of the universe, the only  
God)」という超越的存在と「伝統 (the line of succession,  
ortholion)」という過去世代 (the past generations) の恩人の  
系列を重視することである。廣池及びモラロジーの自然観の基  
本的な立場として、この超越的存在は、自然と同一視される場  
合があるので、<sup>4)</sup> そのような位置づけにある超越的存在と自然と  
人間の関係性を探ること、あるいはそのような関係性を念頭に  
置いて考察することが、本稿の中心軸となる。

「伝統」という過去世代の恩人の系列と「自然」の関係に関  
しては、最高道徳の実行面に深く関係する問題であり、「自然  
の法則 (law of nature)」に従うこと、あるいは「伝統」を尊  
重すること等の実践的な道徳実行論、あるいはそれに伴う価値  
論として展開される傾向があるため、本稿では基本的に取り上  
げないことにする。本稿で考察するのは、あくまでモラロジー  
において、超越的存在と自然と人間の関係性が、どのように位  
置づけられ、またどのように捉えられているのか、という存在  
論的な問いであり、価値論的な問いではないことを明記してお  
きたい。

なお、価値論的な問いとの関わりでは、先ほどの「自然の法  
則に従う」あるいは「伝統を尊重すること以外にも、「義務  
を先行する」、「自我を没却する」、「神意を実現する」、「人心を  
開発救済する」という「行為(方法)」、それから、その背後に

ある「動機（や目的）」などを問題にした新たな議論が必要なため、それについては今後の課題としておきたい。このような手順を踏む理由は、果たして廣池自身が「ヒュームの法則 (Hume's law)<sup>(5)</sup>」あるいは「自然主義的誤謬 (naturalistic fallacy)<sup>(6)</sup>」を犯していない、と言えるのかどうかを再検討する必要性を筆者が感じているからに他ならない。言い換えれば、理想とすべき「最高道徳」、特に過去世代に当たる「伝統」の尊重及び、現在世代 (the present generations) と未来世代 (the future generations) を含めた人々の人心開発救済の実行の価値（「すべきである」）を問うことも重要であるが、その前に存在論的な視点から超越的存在と自然と人間の関係性（「である」）を把握する必要があると、筆者自身、考えているからである。<sup>(7)</sup>

### 一 廣池千九郎の倫理・道徳思想における自然観の位置づけ

廣池は、我々人類が、これまで連続と永続してきた宇宙自然（「神（本体）」としての超越的存在）、あるいは「伝統」という過去世代の恩人の系列から、多大な恩恵を継承してきた事実を認め、当時の最先端の科学と学問の見地も踏まえて、それらの恩恵に報いることが人類進化の法則であると主張した。そのた

めの具体的な方法として、世界の諸聖人（特にソクラテス、イエス・キリスト、釈迦、孔子）及び日本の天照大神を祖とする歴代天皇の事蹟研究と自身の体験をも踏まえ、過去の道徳的恩恵に対する感激と感謝、その精神から生じる自発的な道徳行為である「伝統尊重」、そして積極的に未来へと希望をつなぐ「人心開発救済」という利他的行為に、人間としての生きる道を見出そうとしたのであった。

そして、廣池は自身のライフワークの集大成として、その道歩んだ者（個人・家・企業・国家等）自身が、未来に向かって持続可能な「進化」（個人・家・企業・国家等の生存・発達、運命の改善）を期待できる未来志向型の学問として、モラロジ―を世に問うたのであった。

それでは果たして、我々現在世代の人類は過去あるいは過去世代からの恩恵を受け取ってきた事実を認識あるいは自覚し、それに報いるような生き方をしてきたであろうか。廣池は自らの生きた時代情勢に鑑み、忘恩に陥りやすい人類社会の現状を重く受け止め、そのことに対して警鐘を鳴らし続けたのであった。そのように恩恵享受の認識・自覚がないために恩返し<sup>(8)</sup>がでない原因を、廣池は「利己主義 (egoism)」あるいは、「個人主義 (individualism)」、「民主主義 (democratism)」とつづいた近代の思想的風潮に求めたのであった。本稿も、このような廣池の問題意識を共有している。

では、廣池の生きた時代（一八六六生—一九三八没）に最も深刻であった地球規模での危機は何であったのかというと、まず挙げられるのは「戦争（war）」であろう。廣池が、人類が進むべき道として提唱したのは、その戦争の対極にある「平和（peace）」であり、生涯、平和への志向性を持ち続けた。<sup>(11)</sup>

廣池が当時の社会・国際情勢に鑑み、『道徳科学の論文』（一九二八年初版発行、第一巻第九章上・下）において識者に具体的に訴えたのは、「人類の平和及び幸福享受の方法に関する現代人の思想の誤謬<sup>(12)</sup>」と、「労働問題・小作争議・国家的公共事業・社会事業もしくは慈善事業に対する貴族・富豪・資本家ならびに地主の方針及び方法の誤謬<sup>(13)</sup>」という問題であった。廣池は、それらの誤謬を道徳的方法で正さない限り、人類の安心・平和・幸福は実現しないと考えたのである。

しかしながら、本稿で中心的に取り上げるのは、ここで示されているような人間社会内だけの不和ではなく、人間と自然の間の不和<sup>(14)</sup>である。その代表的事例が、現代の人類が直面している共通課題の地球環境問題であり、本稿では、その解決への道を探る手がかりとして、廣池及びモラロジーの思想（自然観）に注目することになる。

もちろん、廣池の生きた時代には、地球規模での環境問題がまだ深刻化していなかったため、地球環境問題に関する廣池自身による直接の発言や提言が見られない点には注意が必要であ

る。しかし、廣池及びモラロジーの自然観とその現代的意義を再考すれば、地球環境問題の解決への示唆を見出すことができると考えるのである。

ここで本稿の基本的な立場を述べておけば、現代では主として科学の研究対象である「自然」と、宗教や信仰の領域にある超越的存在（「神」）とを学問的に分離しなかった廣池及びモラロジーの自然観は評価に値すると考える。その理由は、筆者自身、科学と宗教の対話という道が、地球環境問題の解決に必要であると考える立場を取るからである。自然（地球環境）をめぐる科学的な分析と、自然（超越的存在／神）への畏敬の念が重なり合うところに、希望ある地球と人類の未来が拓けるのではないだろうか。

いま述べたことは、現時点では倫理的な理想論の域から脱していない恐れもあるが、この点に関しては、本稿の終わり方で、「深遠の信仰は科学と合す」という格言を残した廣池の道徳論との関連で再び触れることにしたい。

## 二 廣池千九郎の事跡と思想に見る自然観と

### その現代的意義

本章では、モラロジーの提唱者である廣池千九郎の自然観に焦点を当てた先行研究を取り上げ、廣池の自然観の現代的意義

について考察するが、前述したように、廣池の事跡と思想の両面からのアプローチを試みる。特に事跡面では「谷川講堂建設時のエピソード」に見る廣池の自然観を、思想面では『道徳科学の論文』に散見される自然観を検討し、超越的存在と自然と人間の関係性については、章を改めて考察する。<sup>(15)</sup>

## (二) 廣池千九郎の自然観と現代の自然観・環境思想・自然科学との接点

前章でも触れたように、廣池の展開したモラロジーにおける倫理・道徳思想や道徳実行論は、主に人間の精神作用と行為をその対象としたものであった。しかしながら、それと同時にあるいはそれ以上に、モラロジーの思想を貫くものとして、自然と人間の関係、さらに超越的存在と自然と人間の関係が大きな位置を占めていることにも注目しなければならない。

例えば、廣池は、『道徳科学の論文』第三緒言の「第二条将来モラロジー研究所において引き続き研究を必要とする諸項目の概要」<sup>(16)</sup>において、冒頭の三項目でその関連の研究に言及し、後進への課題としている。その三つの項目名は、「(1) 生物及び人間の生命の連絡に関する研究」、「(2) 自然力の人間に及ぼす影響と一般生物に及ぼす影響との比較に関する研究」、「(3) 自然力と人間の道徳との関係の研究」である。<sup>(17)</sup>

その要請に応え、これらの課題を継承した研究としては、例

えば、目黒章布(一九八三)、松浦勝次郎(一九九二、一九九五、二〇〇〇a、二〇〇〇b)、立木教夫(一九九六、一九九九)、大野正英(二〇〇六)、伊東俊太郎(二〇一〇、二〇一一)、岩佐信道(二〇一一、二〇一三)らの論文や論考が挙げられる。

立木(一九九六)は「廣池は、一九二〇年代に、洋の東西にかかわらず、人類がすでにとらえてきた『生きた自然』という考え方の存在を指摘し、それを現代的に再構築する必要性を示唆したのである」<sup>(18)</sup>と言及したうえで、「一九九〇年代後半に入つて、この問題は、まさに人類の生存を左右する深刻な問題を契機として、真剣に取り組まれることとなったのである。」<sup>(19)</sup>と述べ、廣池の自然観の現代的意義を主張している。また大野(二〇〇六)も、廣池の「生命の連絡」に関する研究に触れつつ、その「自然観は、現代のエコロジー(生態学)とその基本的認識を同じにしていると云ってよい」<sup>(20)</sup>と述べ、現代の学問(生態学)との関連性に言及している。

一方、伊東(二〇一〇)は、「他人事の関係」では環境問題を解決できないと主張し、「我々は明らかに自然の一部」であり、「自然は長い進化によって繋がっている我々の兄弟」であるという立場を明らかにしたうえで、「こういう立場が確立したときに環境問題に対する態度が変わってくる。科学の見方も違ってくる。人間の生き方も変わってくる。人間の自然に対す

る態度が変わってくる。そのことによって二十一世紀の新しい自然と人間との関係が樹立される」と主張する。さらに、「人間と自然を一体化して捉える廣池博士のこの自然観、倫理観は大きな意味をもっている」ので、「このような見方から廣池博士のいうモラロジーを捉えなおしていくことが非常に大切なのではないか」と述べているが、特にこの部分は、廣池の自然観の現代的意義を考えるうえですこぶる重要な指摘であろう。これらの研究から浮かびあがる廣池の自然観（あるいは倫理観）の特徴の一つは、「人間と自然を一体化して捉える」ことにあると言って良いだろう。さらに「廣池博士がなぜこのように『自然』を特に重要視したのかということが、もっと追及されてよい」し、「その自然観の中身を今日的状況において再吟味してみることが必要<sup>(23)</sup>」であるという伊東（二〇一一）の主張は、まさしく廣池の自然観を研究することの現代的意義を明らかにした至言である。このように廣池の自然観には、現代の環境思想やエコロジー論に通ずる部分が多分に含まれており、現代の地球環境問題を考えるうえで非常に有益な視点を読み取ることができるのである。

さらに、現代の自然科学や自然観との関連で考えれば、廣池の自然観には、地球が生物と相互に関係し合い環境を作り上げていることを、「巨大な生命体」として捉えるイギリスの科学者ラヴロック (James Lovelock) の「ガイア理論 (Gaia

theory)<sup>(24)</sup>」や、自然を「自分で自分をつくっていく、新しい秩序をつくり出してゆき、分化し、多様化していく<sup>(25)</sup>」ものと捉える、「創発自己組織系 (the emerging self-organizing system)」としての自然という見方とも共通する視点があり、その意味で科学的な普遍性を持ち得るとともに、現代的意義を見て取ることも可能である<sup>(27)</sup>。後で具体的に見ていくように廣池の自然観は、東洋（日本）の文化的影響が色濃く見られる一方で、現代の自然科学及び自然観からも再評価できる、普遍的な思想的パラダイムを内包していると考えられる<sup>(28)</sup>。

## (二) 事跡から見る廣池の自然観に関する先行研究

欠端（一九九一）は、生存競争の渦中にあつた青年期の廣池の反自然的な生き方から、中年期から最晩年期までの「自然的な生き方」への転換の様子を緻密に描き出している。そのような最晩年期における廣池の「自然的な生き方」を象徴する出来事として、昭和十年（一九三五）の道徳科学専攻塾開設時のエピソードが引き合いにだされている<sup>(29)</sup>。そしてこのエピソードから、「広池は、生命あるものは人間のみならず植物も動物もこれを非常に大切に<sup>(30)</sup>した」、「広池は常に人間と自然界の生命とが調和を保って成長して行くよう配慮した<sup>(31)</sup>」、「広池の自然的な生き方とは、自然の中に生まれて来た人間が、極力自然と調和して生きようとするものである<sup>(32)</sup>」などの廣池の自然的な生き方に

注目している。<sup>(33)</sup>

これらから浮かび上がる廣池の自然観は、谷川講堂建設時のエピソードにおいても顕著に表れているのだが、欠端自身は、谷川のエピソードを取り上げていない。それに対し、大野は「廣池博士の自然観<sup>(34)</sup>」と題した論考で、その谷川での廣池の事跡を検討するところから論を説き起こしている。

以下、『谷川温泉の由来』（一九六七年、広池学園出版部、以下『由来』）、『伝記廣池千九郎』（二〇〇一年、モラロジー研究所、以下『伝記』）、『廣池千九郎の行迹77篇』（二〇〇六年、モラロジー研究所、以下『行迹』）をもとに、谷川講堂建設時のエピソードを手がかりにして廣池の自然観を詳しく検討したい。

### (三) 谷川講堂建設時のエピソードに見る廣池の自然観

まず、『由来』では、自然物の生命保護に対する廣池の深い配慮をうかがい知ることができる。

「なぜこの木の根を切った。この木の根は生きておるぞ。土台は死んでおるぞ。なぜお前は生き物を大事にせんのか」と言つて、うんとしかられたことがあります。なぜ生き物を大事にせんのかという、そういうものの考え方が博士を貫いている。<sup>(35)</sup>

これは木と木の間之家を建てる際、土台を作るために根を切った門人に対して、廣池が語った言葉であり、廣池の自然観を表現する際にしばしば引用されるエピソードである。例えば『行迹』の中で大野は、「この言葉が示すように、廣池博士の思想には、万物を愛し、育てていく精神が一貫して流れていきます。人間が生活していくためには、やむをえず生き物を犠牲にしなければならぬが、その犠牲は最小限にとどめ、どこまでも生き物を大事にするという生命本位の心が、博士の精神でした。<sup>(36)</sup>」と述べ、この言葉から「万物生成化育」あるいは「生命本位」という廣池の思想を読み取っている。

ここでは、廣池の「生き物」という言葉が印象的である。廣池の自然観は、抽象的で形而上学的な生命保護の思想ではなく、目の前で生きている「生き物」への愛や慈悲の精神に支えられているのだ。このような視点から、廣池の神（本体）観や伝統観を、有機的な生命論の視点から包括的に捉え直せば、現代的な課題である地球環境問題や環境危機の克服のために社会制度変革へと結実していく役割を担う環境思想論にも示唆を与えることになると思われる。

また廣池は、そのような自然の尊重が人間の尊重にもつながると考えている。

目的は家を建てることかもしれないけれども、そのために

生き物を犠牲にすることは最小限にして、生き物を大事にしなければいかんということが、人間を尊重していくというに通じていくと思いますね。(中略) どんなことをやる時でも人格本位、生命本位です。<sup>37)</sup>

これも門人の回顧であるが、「生命本位」に加えて、人間の尊重や「人格本位」という要素も含まれている点に留意する必要がある。次章で詳しく見るように、廣池とモラロジーの思想では、自然、人間、そして超越的存在の相互関係性がその中核に据えられているのである。

『由来』からの以下の引用は、学術論文(書籍)に宿る生命に言及している点で興味を引く。

何か『道徳科学の論文』の根本を流れている天地自然の法則だとか、人類進化の法則だとかいったことが、鷺津さんのような具体的なお話を伺っていると、何となしに非常に生き生きとしたものとして感じられてきますね。<sup>38)</sup>

これは廣池の思想(『道徳科学の論文』)が事跡(谷川講堂建設時のエピソード)において具現化されていることを示唆する重要な指摘であるが、あくまでも一個人の主観的な感想ではあるため、『道徳科学の論文』の根本を流れている天地自然の法

則』の具体的な内容を理解するには、立木(一九九九)の論文などを参考に、より緻密な論考が必要になる。つまり、廣池の言う「自然の法則」の概念構造の多様性と重層性を踏まえたうえでないと、厳密な意味で廣池の思想から事跡への架橋が成立し得るかどうかが確定できないということである。

続いて、『伝記』には神壇建設のエピソードが収載されている。

千九郎は、専攻塾建設の場合と同様に、まずいちばん大きな山桜の木がある所に麗澤教育の中心となるべき神壇をつくった。そのほかの建設計画は、木と木の間に建物をつくらうというものであった。<sup>39)</sup>

「山桜の木」という自然物を意識して「神壇」を建てるという発想は注目に値する。これは、自然と超越的存在の間に、ある種の親和性を見出そうとする廣池の特徴的な自然観であり、それと同時に、「いちばん大きな」木がある場所を選んだという点も非常に興味深い。木の大きさは樹齢の長さを示すものであり、そのような木の存在自体が、その場所の永続性、すなわち過去から時間的にも空間的にも安定的に存在してきたことの証しであると考えたのではなからうか。そのような自然の場が過去から連綿として永続してきたという事実を認識することに



よって、未来に向けての希望が生まれ、その土地がこれからも安定的に存在することを帰納的に予感させるのである。

廣池は、超越的存在を前提として、自然と人間双方の生成化育における有機的連関性を認めているのである。

千九郎は、「ものが育つのを妨害することは、神に対する罪悪である。教育でも、その人のよき個性、天性を神の心に合致するように伸ばして育てることが人間尊重の心であり、神の心である」と教えている。千九郎は、物の育つ姿を楽しんだ。木や花そのものが好きだというよりも、生命のあるものは一木一草に至るまで大切にすると、慈しみ<sup>(40)</sup>の心からであった。

この部分は、『道徳科学の論文』で言及される「神に対する罪<sup>(sin)</sup>」の説明を想起させる<sup>(41)</sup>。その中には草木に対する罪もあり、例えば、路傍の花を折り棄てることはsinに当たる、というのが廣池の見解であるが、これに関しては後ほど詳しく検討したい。ここでは、物が育つということ、生命を大切にすること、そして自然を慈しむといったことが、廣池の自然観の中核をなす生命倫理観であることを確認しておきたい。

#### (四) 思想から見る廣池の自然観に関する先行研究

目黒章布の論文「広池博士の自然観」<sup>(42)</sup>は、この研究分野で、廣池の自然観を包括的に浮き彫りにしたものとしては先駆的である。目黒は、『道徳科学の論文』の「第二版の自序文」の冒頭部分にある「相互扶助の原理」が「廣池の自然観の実質的な中心概念となっている」と指摘し、現代の「生物社会学」の視点から、「今日のように自然破壊の問題が起きていなかった昭和の初期に、かかる生態学的原点を廣池博士が強調していたということは一つの驚きでもあるが、以上のような点からいっても、相互扶助の原理は今日においても立派に通用する現代性を有しているといえるであろう。」<sup>(43)</sup>と述べている。

これと同様の文脈で廣池の自然観に注目したのが、岩佐信道の「相互依存のネットワークの中で生きる人間のモラルとしての最高道徳」<sup>(44)</sup>と「相互依存のネットワーク、地球システム倫理そして最高道徳」という論文である。岩佐もまた、「第二版の自序文」の冒頭部分に着目し、相互扶助の原理（相互依存のネットワーク）の現代的意義を考察しようとしている。後者の論文では、「廣池が、『宇宙自然の法則』、『天地の公道』に従うとして示した最高道徳の原理は、最も徹底した意味での地球システム倫理の具体的展開といえる」と述べ、「最高道徳」を「地球システム倫理」という側面から再解釈・再評価している。

## (五) 『道徳科学の論文』に見る廣池の自然観

上の事跡面に基づいた廣池の自然観の考察の部分でも触れたが、「神に対する罪 (sin)」という視点から、廣池の自然観を検討しておきたい。『道徳科学の論文』の第十四章第十一項第二節「人類に対する人心救済の重大なる使命」<sup>(85)</sup>には、犯罪 (crime) と宗教的罪 (sin) の違いについて次のような説明がある。

自分が過食して胃を害したとか、過労して健康を害したとか、大声を発して隣人を驚かしたとか、みだりに路傍の花を折り棄てたとかいうごときことは、何らの犯罪とも考えておらなかったであります。しかるに、これがみなクライムには該当せずとも、シンには該当するのであります。  
(傍点筆者)<sup>(86)</sup>

ここでは「みだりに路傍の花を折り棄て」ることが、「神」に対する罪に当たる、とされている。廣池は、自然と超越的存在の連関という視点から、自然(花)を害する行為は、法律上の犯罪(クライム)には該当しないが、「神」という超越的存在に対する罪(シン)には該当すると言っているわけである。<sup>(87)</sup>

さらに「罪」という悪行だけでなく、「愛」のような、極めて人間的な善事においても、自然は人間の意識や行動の対象と

なる。

個人に対してその精神を救済しもしくはその物質的生活を救助するときことは、神及び聖人の大慈悲心に合する善事であります。神及び聖人の教えは草木に至るまでこれを愛する原則なれば、いやくも最高道徳の実行においてはいかなるものをも救助すべきであります。(傍点筆者)<sup>(88)</sup>

この傍点部分の記述も、やはり超越的存在と自然の連関を考察するうえで極めて重要な指摘であるが、問題は「聖人(ソクラテス、イエス・キリスト、釈迦、孔子)」の「教え」において「草木に至るまでこれを愛する」ことが原則であったかどうかである。このことは、伊東(二〇一〇、二〇一一)が「自然」を「精神革命」において残された問題だと指摘したことを想起させる。伊東は、「精神革命」の特色が人間の「精神」の救済にあつたとし、直接的に自然が彼ら精神的指導者の考察の対象になつていなかったと主張する。<sup>(89)</sup> 廣池は、「草木に至るまでこれを愛する」ことを(神及び)「聖人」の慈悲の深さの比喩として述べているのか、それとも具体的な原典を念頭に置いているのか、この一文だけでは判断しがたい。<sup>(90)</sup>

しかし、廣池が「生物を殺さず、仁草木に及ぶ」という格言を遺し、人間以外の動植物に対する「仁」や「慈悲」という精

神を「最高道德実行上の注意条件」の一つとして挙げているのは疑いのない事実である。

今日慈悲の根柢に立つところの最高道德においては、家業・職務もしくは学術研究のごとき、人間の生活上、万やむを得ざることを除きては、みだりに動物を殺すということとを是認せぬのであります。<sup>(55)</sup>

最高道德にては、その慈悲は草木にまで及び、みだりにこれを伐採せず、且つ戯れに草木の芽を摘み取るなど無益のことをなさず、常にこれを擁護する精神を有せねばならぬのであります。<sup>(56)</sup>

『道德科学の論文』の中では、この引用文が最もよく自然（動物を含む）に対する仁や慈悲の精神を表明したもので、先駆的な環境保護思想の記述と受け取って良いだろう。しかも、単に倫理思想の範囲内にとどまらず、（最高）道德の実行論として主張されている点は注目すべきである。本稿では、基本的に理論的な思考を伴う「倫理」を問題にする立場を取っているが、その実行可能性（feasibility）を考え、実践を伴う「道德」の領域への展開も見据えているため、その点については本稿の末尾で再び触れることにしたい。

さらに以下では章を改めて、廣池の思想の集大成である『道德科学の論文』における、超越的存在と自然と人間の関係性を考察するべきであろう。<sup>(57)</sup>

### 三 『道德科学の論文』に見る超越的存在と自然と人間の関係性

本章では、『道德科学の論文』における超越的存在と自然と人間の関係性に着目したい。その文字資料は、特に『新版道德科学の論文』の「第二版の自序文」から「第三緒言」までの記述（三人の博士の序文を除く）が中心となる。その理由は、この部分に『道德科学の論文』の全体像が集約的に記されているからである。ただし、必要に応じて『道德科学の論文』の他の部分の記述をも参照する。

#### （二）宇宙と森羅万象と人間

目黒（一九八三）や岩佐（二〇一一、二〇一三）も、第二版の自序文の記述には着目しているが、それはここで廣池が「森羅万象」を含めた宇宙論を披瀝しているからである。

天地剖判して宇宙現出し、森羅万象この間に存在して、い  
わゆる宇宙の現象を成すに至れるは、偶然にして然ること

は出来ないのである。必ずやその原理もしくは法則ありてここに至れるものである。故に宇宙間に産出してこの間に生存するところのわれわれ人間としては、この宇宙自然の法則に従わねばならぬことは明らかであります。(傍点筆者)<sup>(83)</sup>

前半の傍点を施した「天地剖判して宇宙現出し、森羅万象この間に存在して、いわゆる宇宙の現象を成すに至れる」という記述は、『古事記』冒頭の宇宙論を髣髴させるが、ここで注目されるのは、「現象」という表現である。この関連で廣池は、「宇宙の現象を本体の作用とみる事が出来る」という立場を取っている。<sup>(84)</sup>

さらに、この「現象」との関連で興味深いのは、廣池において「人間」もまた「現象」として捉えられていることで、「私ども人間は、既述のごとくに、この宇宙の自然界に発生したる現象の一つであつて、この自然界の支配を受けて生存・発達もしくは変化を遂ぐるのであります。」と述べられている。ここでは宇宙と自然と人間の関係性が簡潔に描き出されているにすぎないが、『道徳科学の論文』の第三章、第四章、第七章、第八章にも見られるように、廣池はそれが諸科学の原理にも一致するものだと考えている。<sup>(85)</sup> 廣池は、それらを「聖人の教説と実行」に加えて、「最高道徳実行の原理の基礎」をなす学問的

理だとしている。<sup>(83)</sup>

次に後半の「宇宙間に産出してこの間に生存するところのわれわれ人間」という部分についてであるが、これは、例えば自然科学の研究成果や哲学の「宇宙における人間の地位」(シーラー)の議論にもあるように、問題なく受け入れられる人間観であろう。<sup>(84)</sup>

さらに、廣池は聖人と「神」という超越的存在の関係について、「すべての聖人は、みな神を信じてその神意に同化し、親しくその神意のとおりを実行すると申しておるのです。さればわれわれ人間は直接に神に接したることはなけれど、神の存在と性質とを合理的に知ることを得るのです。」と述べている。これは神の認識論についての言及で、人間は「聖人」を通して「神」という超越的存在とその性質を合理的に知ることができるといふわけである。

廣池の言う「神」は、哲学上の語で言えば「本体 (entity)」としての「神」であるが、下程勇吉も指摘するように、これは宗教とモラロジーを区別するうえで重要である。「聖人」と「神」の関係について、廣池は、キリスト教のイエス・キリストの受肉説のように、「宇宙根本唯一の神」が「現神」として現れるという神から人間への「肉化説」を退け、「現神」から「宇宙根本唯一の神」へ至る「昇華説」を取っている。<sup>(85)</sup> つまり、一般の人類は、「聖人」すなわち「現神」がいなければ、「本

体」の「神」の存在と、その性質を知ることができなかった、というのが廣池の主張である。言い換えれば、人間は神的な人格を備えた「聖人」という媒介者を通じてこそ、「神」という超越的存在につながるができるということである。その意味で、「聖人」の存在は極めて重要である。

廣池は、このような聖人の教説が、人類の歴史上、様々な紆余曲折を経たものの、現代にまで伝わってきたと考え、そこに「伝統の原理」の成立を見る。聖人の教説は概して、仏教やキリスト教などのような「宗教」や「信仰」という形で継承されてきたと言えるが、モラロジイでは、それらの教説・教訓に一貫する統一原理を「最高道德」として学問的・科学的に捉えようとするわけである。つまり、ここでは宗教と科学の両面が尊重されているわけだが、筆者は、この点にこそ、地球環境問題の解決の糸口を見出せると考えるのである。地球環境すなわち「自然」を科学的・合理的に観察し分析するだけでなく、そのような科学的な学問的範疇では捉えきれない宗教的・文化的・人間的な感性や感覚、例えば「自然」に対する畏敬の念の醸成のようなことも必要ではないかと考える。

## (二) 諸聖人の倫理・道德思想と諸科学の関係性

廣池は、さらに聖人の教説と科学の関係をめぐって「世界諸聖人の眞の教説はことごとく現代における自然科学の原理に一

致」し、「この両者は人類の生存・発達・安心及び幸福の原理」に合致すると主張する<sup>(67)</sup>。さらに、「精神科学及び諸主義」が「聖人の教え」と「自然科学の結論」に反することが多いとも指摘している<sup>(68)</sup>ことから、「聖人の教説」と「自然科学」をより重視している態度がうかがわれる。

そのような廣池の『道德科学の論文』の全体構造を簡潔に示したのが次の一節である。

モラロジイの最初の著書たる本書第十二章においては世界四聖人の眞精神と眞事跡とを記し、第十三章においては万世一系の日本国体成立の眞原因を述べ、これによりてもつてモラロジイの本質の淵源を明らかにし、次に第一章より第十一章において現代の科学的知識を総合し、その一貫せる原理により、もつて世界諸聖人の教説・教訓及び実行の合理性を説明し、次に第十四章及び第十五章においてモラロジイに関する原理・歴史及び内容等、すべてその本質を開示して大方の識者の判断を俟てり<sup>(69)</sup>。

廣池が提唱したモラロジイの全貌が示されていると考えられるが、ここで着目すべきは、章立ての順序とは逆に、はじめに聖人研究(第十二章)と万世一系の日本国体成立の眞原因に関する研究(第十三章)への言及があり、続けて第一章から第十

一章をもって「現代の科学的知識を総合し、その一貫せる原理により、もって世界諸聖人の教説・教訓及び実行の合理性」を「説明」するものと位置づけた点である。つまり、そもそも廣池における「モラロジー研究」の端緒（出発点）は、「世界諸聖人の教説・教訓及び実行の合理性」の探求にあったのである。自然科学をはじめとした諸科学の知見から得られる客観的事実の集積にあつたのではない、ということである。むしろ、廣池が展開したモラロジーにおいて、諸科学の知見は、聖人の教説・教訓・道徳実行の合理性を説明するための学問的装置であつたと言えなくもない。

しかしながらその一方で、科学と聖人の倫理・道徳思想の軽重を天秤にかけるのは早計であろう。というのも、後でも触れるように、宗教的側面から「神の心」を表現したのが「諸聖人」であり、学問的側面から「自然の法則」を説いたのが「諸科学」である、という廣池ならではの言説の在り方からすると、廣池自身が、諸聖人と諸科学のどちらにより重点を置いていたかを一概に断定することはできないからである。上で見たとおり、「最高道徳実行の原理の基礎」は、「聖人の教説と実行」と諸科学の原理の両面に存するのである。

### (三) 人類の超越的存在を認める能力

第二緒言第五条で廣池は「すべての生物はただ物質をもつて

養育されるものでありますが、その中につきてひとり人間のみは神を認むる能力を有し（第一巻第六章第二項第六節参照）、祖先以来の経験に基づき、諸聖人の教説を理解することを得るのであります。」と述べている。ここでは、「人間」の超越的存在（神）を認めることができる能力にまず言及され、その後で諸聖人の教説も理解することができる」と述べられている。一見すると、先ほどの「聖人」から超越的存在（神）へという「昇華説」とは逆方向の流れを指摘しているように思えるが、これは人類学や宗教学（あるいは宗教現象学）等の立場から人間の認識論を時系列的に見た陳述であろう。すなわち、人類が「神を認むる能力」を獲得したのは、「聖人の教説」が登場するよりも前であつたということである。ここでは単に人間が、人知を越えた存在としての神を「認める」という行為を問題にしているのであり、上で見たような「本体 (reality)」に至るような神の本質論まで踏み込んでいない、とも解釈できる。「聖人」を経由しないと、人間はどのような真の「神の本質」を知ることができない、という廣池の立場に揺らぎはない。

この部分で廣池が主張しているのは、他の生物を凌駕する人間の「精神」面での優位性であり、それを象徴する特徴が「神を認むる能力」なのである。廣池は「元来、この人間は、天啓にては、神の創造であり且つ神の力によりて進化するものと称せられており、科学にては、自然の発生物であつて進化の要素

を有するものであると称せられておるのであります。」と述べ、「宗教」と「科学」の両面から進化的な議論を展開している。人間の優位性については、「すなわちいずれにしても、人間はこの宇宙間における自然の産物中、優越せる精神作用を有するものにて、絶えず創造せられ進化するものであるのです。」と述べられているように、「自然」における「人間」の特異性（精神作用）から生ずるものとされる。

次に第二緒言第六条では、「神に対する信仰」のモラロジーにおける位置づけが述べられている。すなわち「モラロジーは聖人の教説・教訓及び実行に一貫するところの学問・思想・道徳及び信仰を科学的に組織せるものなれば、その性質上おのずから神のことを述ぶる」とあり、前述したように「聖人」と「神」の不可分の関係性が強調されており、「現神」と「宇宙根本唯一の神」の一貫性の視点で捉えることが可能である。

おわりに

廣池の考える超越的存在は、「自然」（「宇宙」）と同一視される場合がある。宇宙の一員である人間も、その超越的存在と密接な関係にある自然界の一現象として捉えられているのが、廣池の思想の特色であり、その超越的存在の「本質」を掴むためには、超越的存在と人間の間に「聖人」という媒介者の存在が

必要である、というのが廣池の一貫した主張である。

言うまでもなく、自然界の本質的に重要な現象に着眼し、現象把握に必要な有効概念を確立し、現象を支配する法則を発見するのが自然科学であるので、自然と人間の関係性に関して、自然科学の知見から両者の関係性を見出すことはある程度まで可能である。しかしながら、超越的存在と人間の関係性に関しては、自然科学の範疇を越えるものとなる。そこで、モラロジーにおいては「聖人」の存在が大きな役割を果たすことになるのだが、廣池の自然観を理解しようとすると、自然と超越的存在の関係、さらに聖人の教説・教訓・実行との関連性に触れないわけにはいかなくなるのだ。

超越的存在と自然と人間の関係性を明らかにするうえで、自然・社会・人文諸科学から得た当時の総合的知見と、聖人の教説・教訓・実行に一貫する統一原理とを学問的に統合しようとした点は、廣池のモラロジー研究の一つの大きな成果であり特色であると考えられる。

地球環境問題を自然科学だけの見地から解決しようとする試みに限界が見えはじめている現代において、廣池及びモラロジーの自然観は、総合人間学的見地から一つの方向性を提示しているとは言えないだろうか。つまり、「科学」の倫理化と「宗教」の脱ドグマ化を目指す両者の対話こそが、地球環境問題に一石を投じることになるという考え方である。その意味で廣池

自身が遺した格言の一つ「深遠の信仰は科学と合す」<sup>(78)</sup>は、これからの未来社会に対する倫理的・道徳的基軸として、大きな意味を持つてくるであろう。<sup>(79)</sup>

## 注

- (1) ここでは地域的に限定的な「公害」等のような環境問題ではなく、地球温暖化や核廃棄物の処理など、地球規模でかつ未来世代の生存に関わる環境問題を指す。
- (2) 目黒(一九八三)、松浦(一九九二、一九九五)、立木(一九九六、一九九九)、大野(二〇〇六)等を参照。
- (3) 初版発行は昭和三年(一九二八)。本稿では、現代表記に改められた新版(一九八五、一九八八年出版)を使用する。
- (4) 廣池は、中国の『毛詩』、日本の『古事記』、仏教の大乗の諸説、西洋の汎神論、キリスト教の諸説を検討し、「神と宇宙と自然との同一なること」(廣池、一九二八/一九八五a、二四七頁)を前提としている。しかし、廣池は続けて「要するに、かくのごとく人間の知識を超越せる神の本質を人知によって定めんとすることは全く不可能の事業であります。」(廣池、一九二八/一九八五a、二四七頁)とも述べており、「神の本質」に対する人間の知識の限界についても認識している。廣池は、聖人の教説に基づいて「神の本質」を掴むという根本的な姿勢を貫いているが、この点に関しては、後ほど再び触れることにする。
- (5) イギリスの哲学者ヒューム(David Hume, 1711-1776)は『人間本性論』(第三篇、第一部、第一節)において、次のように述べている。「これまで出会ったあらゆる道徳の体系で、私はいつも次

のことに気がついた。著者はしばらくの間通常の推理の仕方では論を進め、神の存在を結論として立て、あるいは人間の間の事柄について所見を述べる。すると突然、驚いたことに、『である』(is)や『でない』(is not)という命題の普通の繋辞に代わって、私が出会う命題は、どれも『べきである』(ought)や『べきでない』(ought not)という語を繋辞とするものばかりになるのである。この変化は目につかないが、きわめて重大である。この『べきである』や『べきでない』という語は、新しい関係ないし断定を表わすのだから、その関係ないし断定がはつきりと記され、説明される必要がある。同時に、この新しい関係がそれとは別の、まったく種類の異なる関係からの演繹であり得るとは、およそ考えられないと思われるのだが、いかにしてそうであり得るのか理由が挙げられる必要があるからである。」(ヒューム、一七四〇/二〇二二、二二一―二三頁、傍点筆者。)(この部分の記述が一般に「ヒュームの法則」と呼ばれているもので、ヒュームは、「〜である(is)」という事実から即、「〜すべきである(ought)」という倫理(規範)を導き出すことができないことを指摘した。

(6) イギリスの哲学者ムーア(George Edward Moore, 1873-1953)は『倫理学原理(Principia Ethica)』(ムア、一九〇三/二〇一〇)において、「自然的(natural)」な事実及び「形而上学的(metaphysical)」な「超感覚的実在」をもって、「価値」や「善い(good)」とは何かを定義しようとするこの誤りを主張した。

(7) なお、廣池は、ある部分では「ヒュームの法則」あるいは「自然主義的誤謬」を犯している、と解釈され得る記述も残している。『道徳科学の論文』の「第二版の自序文」の冒頭で、廣池は、森羅万象がみな連絡していて、人類は宇宙(自然)の一部「である」と



いう事実から、「自然の法則」に従う「べきである」という「規範」を導いているが、これが、「誤り」なのではないか、という問題提起が可能なのである。廣池の（聖人論の）場合、この「自然の法則」に従う（原因）先に、人類の「進化」（安心・平和・幸福）という「結果」があるとされるが、廣池が「進化」に「価値」を見出した理由も併せ含めて、この「自然主義的誤謬」の問題を考えなければならぬであろう。しかし、この点だけをもって、廣池の主張（「最高道徳」実行の価値や必要性を説くこと）自体を退けるのではなく、ヒュームが言うように、「いかにしてそうであり得るのか理由が挙げられ」ているか否かを、廣池が遺した理論と実践の総体において検討することが重要であろう。

その関連で、立木（一九九六）や伊東（二〇一三）は、二十世紀から二十一世紀の動向（地球環境問題や、自然主義的倫理、自然主義的哲学等）を念頭に置いて、自然との関わりから倫理・道徳を導き出すことに意義を見出すことが可能だとする立場を取っている。つまり、廣池は「自然主義的誤謬」の問題を回避できているのではないか、という立場である。一方、水野（二〇〇八）は、廣池の学問論の基礎に「自然科学主義」があり、自然的事実から人間や社会の原理を導き出そうとした点において、反省点があると指摘している。（水野は、廣池が諸科学の中で「自然科学」を最重要視したとして、その点に筆者としては疑問が残る。）ただ、他方、廣池の「自然的事実を公平に認識しようとする姿勢」（水野、二〇〇八、九三頁）に関連して、「信仰や神秘主義の世界に起こりがちな恣意性を排除しようとする点」は、大いに価値あることと評価すべき（水野、二〇〇八、九三―九四頁）であると述べていることを付け加えておきたい。ここに挙げた三者に共通する問題意識は、

「（自然）科学」的事実から、倫理・道徳の必要性を説けるのかどうか、ということである。特に廣池の場合「最高道徳」が問題になり、その価値や必要性を世間に問うたのであったが、「自然主義的誤謬」の問題の検討は、モラロジーの存立基盤を問い直すことにつながる重要な議論であると言える。

なお、「ヒュームの法則」及び「自然主義的誤謬」の理解については、愛知県在住の鋤柄雄司氏（モラロジー専攻塾第二十期生）から示唆を得た。ここに記して、謝意を表したい。

(8) この点に関連して、廣池は、「恩恵」という視点のみならず、「借財」という視点も重視していることに注意が必要である。

(9) あるいは、未来世代への「恩送り」。

(10) 廣池は「世界永遠の平和の問題」に加え、「労働問題その他人類の危機を含むところの諸問題」に関して、その「根本的解決法」を各国の最高識者と面会して議論する、という構想を持っていた（廣池、一九二八／一九八六a、序一〇七頁）。

(11) この点に関しては、廣池が「モラロジーは世界永遠の平和の実現の基礎を成すところの一つの専門学であって、しこうして本書はその専門学であるということが出来るのであります。故に、本書中に一々平和の字句はなくとも、全篇みな世界永遠の平和実現の方法を述べたものであります。」（廣池、一九二八／一九八六a、序一二〇頁）と述べていることから明らかである。

(12) 廣池（一九二八／一九八七）、四頁。

(13) 廣池（一九二八／一九八七）、七頁。

(14) ここでいう不和とは、人間の側から自然（山川・草木・海、その他の動・植・鉱物）の側への一方的な破壊や支配、という現実を指す。

- (15) 本稿では「自然」を「天地間におのずから存在する山川・草木・海などに加え、そこに生きる人間と動物などを含めた森羅万象の総称」という意味で用いている。この定義を念頭に廣池及びモラロジーの自然観を検討するが、今後の課題としては、研究対象とする「自然」の定義の範囲を広げていきたいとも考えている。他にも「自然」には、「おのずからそうなっているさま(じねん)」「おのずからなる生成・展開によって成りいたった状態」「人の力では予測できないこと」などといった意味がある。さらに、里山に代表されるような人間が内在した「二次的自然(humanized nature)」（尾関「ほか」編著、二〇〇五、六〇―六一頁）にも注意を向ける必要がある。本稿でも部分的にはあるが、谷川講堂の建設のエピソードにおいて、そのような「二次的自然」に触れることになる。
- (16) 廣池（一九二八／一九八六a）、序二一九頁。
- (17) 廣池（一九二八／一九八六a）、序一三一頁。
- (18) 立木（一九九六）、一三五頁。
- (19) 立木（一九九六）、一三五頁。
- (20) ここでの「人類の生存を左右する深刻な問題」とは、「地球環境問題」を指す。
- (21) 大野（二〇〇六）、二三五頁。
- (22) 以上、伊東（二〇一〇）、三八―三九頁。
- (23) 伊東（二〇一〇）、二九頁。
- (24) ラヴロック（一九七九／一九八四、一九八八／一九八九、一九九一／二〇〇三、二〇〇六）。
- (25) 伊東（二〇〇八）、ヨコ組三〇頁。
- (26) カウフマン（一九九五／二〇〇八）、ヤンツ（一九八〇／一九八六）など。
- (27) これに関連して、金（二〇一七）は、廣池が重視した「宇宙自然の法則」という概念の現代的意味を、環境問題における自己組織化の世界観との対比において、詳細に検討しており、本稿の主張とも符合するところが多い。金は、廣池の思想における、宇宙自然の「進化」という面と、自然と人間の「調和」あるいは「共生」という面を高く評価している。しかし一方で、「自然と人間がどのように共に生きるべきか」という点には課題が残されていると述べる（金、ヨコ組、三六頁）。この点には筆者も基本的に同意するところであるが、廣池が言う「宇宙自然の法則」に従うことを、「最高道徳」の実行と捉えることが可能なら、その「最高道徳」の内容を検討すれば、自然と人間の共生の具体的な在り方が浮かび上がる可能性が高いと考える。本稿では、後ほど廣池の事跡を検討することによって、自然と人間、さらに超越的存在との「共生」の在り方を考察する。
- (28) これらに加えて、現代から見て時代はやや遡るが、「神即自然(Deus seu Natura)」という概念で知られる十七世紀のオランダの哲学者スピノザ(Baruch de Spinoza, 1632-1677)の思想と、その系譜に連なるノルウェーの哲学者アルネ・ネス(Arne Naess, 1912-2009)らの思想が、廣池の思想(自然観)とどのように関わるのかという問題については、今後の検討課題としておきたい。比較にあたっては、スピノザの名著『エチカー倫理学』(スピノザ、一六七七／二〇一〇a、一六七七／二〇一〇b)や、同じくネスの名著『ディープ・エコロジーとは何かーエコロジー・共同体・ライフスタイル』(Naess, 1989/1990)等を中心に検討する必要があるだろう。
- (29) このエピソードは、後ほど見る谷川講堂建設時の廣池の事跡に

も通じるため、内容を説明しておきたい。廣池はまず、施設の中心を定めた。その時に選ばれたのは、敷地を覆う森の中で最も年輪を重ねた大木であった。その大木の根元に神壇を設け、その前に大講堂が配置され、外部から訪れる人は、その大講堂に向かって続く桜並木に誘導されるように工夫されていた(欠端、一九九一、三二一頁)。このように、その土地で最も大きな木の根元に神壇を建てるといふ発想は、翌昭和十一年(一九三六)の秋からはじまる谷川講堂建設時にも踏襲されている。

- (30) 欠端(一九九一)、三二頁。  
 (31) 欠端(一九九二)、三二頁。  
 (32) 欠端(一九九一)、三二頁。  
 (33) なお、引用文中に現代表記の「広池」が散見され、本稿で使用している「廣池」と統一されていない印象を与えるが、引用に際しては原文を尊重し、「広池」の表記を変更しない方針を取りたい。以下、同様。
- (34) 大野(二〇〇六)。  
 (35) モラロジー研究所出版部編(一九六七)、一二六頁。  
 (36) 大野(二〇〇六)、二三四頁。  
 (37) モラロジー研究所出版部編(一九六七)、一三一頁。  
 (38) モラロジー研究所出版部編(一九六七)、一三四頁。  
 (39) モラロジー研究所編(二〇〇二)、六六二頁。  
 (40) モラロジー研究所編(二〇〇二)、六六二頁。  
 (41) 廣池(一九二八/一九八五b)、一九一―一九四頁。  
 (42) 目黒(一九八三)。  
 (43) 目黒(一九八三)、五一頁。  
 (44) 目黒(一九八三)、五九頁。

- (45) 岩佐(二〇一一)。  
 (46) 岩佐(二〇一三)。  
 (47) 岩佐(二〇一三)、ヨコ組三七頁。  
 (48) 廣池(一九二八/一九八五b)、一九一―一九四頁。  
 (49) 廣池(一九二八/一九八五b)、一九二頁。  
 (50) もっとも、自然保護思想の進んだ現代社会においては、法律上の犯罪にも抵触する可能性がある。  
 (51) 廣池(一九二八/一九八六b)、一九九頁。  
 (52) 伊東(二〇一〇)、三七頁。  
 (53) この関連で、仮に仏教を例に考えれば、大乘仏教を重視した廣池が、その特色である「草木国土悉皆成仏」の思想(自然観)に触れていたことは推察されるが、その点に関しても実証的研究が必要である。また、ここで廣池の言う「聖人」が誰を指すのかも定かではない。さらに言えば、廣池の場合、ここでの「聖人」に「(現神としての)天照大神」が含まれている可能性も残されている。そうならば、例えば『古事記』や『日本書紀』における自然観を、廣池が想定していたとも考えられる。この問題の探求に関しては、引き続き今後の課題としておくが、議論の手がかりとして、「精神革命」と環境変動の関わりについて議論されている、石・安田・湯浅(二〇一三)の中の「精神革命と宗教・哲学」気候変動がもたらした釈迦とキリストの出現(九一―一〇〇頁)を挙げておきたい。  
 (54) 廣池(一九二八/一九八六b)、三六〇―三六一頁。  
 (55) 廣池(一九二八/一九八六b)、三六〇―三六一頁。  
 (56) 廣池(一九二八/一九八六b)、三六一頁。  
 (57) その厳密な考察にあたっては、廣池の神観と伝統観の研究も併せて必要となるが、これについては今後の検討課題とする。

- (58) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序一頁。
- (59) 廣池 (一九二八／一九八五 a)、一二三頁。
- (60) 廣池の神 (本体) 論は、ドイツの哲学者カント (Immanuel Kant, 1724-1804) における「物自体 (Ding an sich)」と「現象 (Erscheinung)」の概念を想起させる(「我々はこれによって現象の認識に達し得るだけであって、決して物自体を認識し得るものではない」、カント、一七八五／一九七六、一五一頁、傍点原文)。下程勇吉 (一九〇四—一九九八) はカントの認識論を踏まえて「人間の認識はつねに感性能力に制約せられ、存在自体には及ばず、その現象性を超え得ない。物自体はあらゆる意味で我々の認識の外にある。」(下程、一九四六、一三五頁、旧漢字は新漢字に改めた) と述べている。しかしながら、以下で見るとおり、神の存在や本質を合理的に知る方法として、「聖人の教説と実行」をその理論的拠り所とした点で、廣池はカントと異なる独自の立場に立っていたと言える。
- (61) 廣池 (一九二八／一九八五 a)、一七〇頁。
- (62) これらの章で取り上げられている主な諸科学を列挙すれば、哲学・宗教学・宇宙論・人類学・生物学・進化論・地球環境学(自然界と人類との関係)・遺伝学・生理学・心理学・人種(改良)学・環境改良学・土俗学・考古学・法制史・犯罪学・骨相学・社会学・倫理学・歴史学などである。現代的には、古くなった考え方や問題点を含むものもあるため、注意は必要だが、これだけ幅広い学際的な視野は注目に値する。
- (63) 廣池 (一九二八／一九八五 a)、一七〇頁。
- (64) しかしながら、そのあとの「道徳」の実行論への架橋に関する記述(「……人間としては、この宇宙自然の法則に従わねばならぬことは明らかであります」)は、「自然主義的誤謬」の問題との関連でさらに慎重な議論が必要であろう。
- (65) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序五—六頁。
- (66) 廣池 (一九二八／一九八五 a)、二二八—二三九頁、下程 (二〇〇五)、二二四頁。
- (67) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序八五頁。
- (68) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序八五頁。
- (69) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序八八—八九頁。
- (70) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序二二頁。
- (71) 人類史において、「聖人の教説」が形成されるのは、紀元前五世紀頃からである。それに対して、人類の「神を認むる能力」が獲得された時期を特定するのは、容易ではない。しかもその「神」を認める能力が、自然信仰を指すのか、唯一神への信仰を指すのかで、時期は異なってくる。しかしながら、いずれにしても、時系列的に「神を認むる能力」が獲得された時期は、「聖人の教説」が形成された時期よりも前であることは確かであろう。この部分の考察は、Sharpe (1975/1986)、ミズン (一九九六／一九九八)、デネット (二〇〇六／二〇一〇)、ウィリアムズ (二〇〇二／二〇一二) 等の研究を参考にした。
- (72) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序二二頁。
- (73) 廣池 (一九二八／一九八六 a)、序二二頁。
- (74) この後、「創造」と「進化」とは、「物質」によって人間を培養しても、その効果がないことを指摘し、「聖人の教説」すなわち「最高道徳」(つまり「神の心(宗教的には)」即「自然の法則(学問的には)」)の必要性を説くに至る(廣池、一九二八／一九八六 a、序二二—二二頁)。

- (75) 廣池(一九二八/一九八六a)、序二二四頁。
- (76) 他にも、先に挙げた第三緒言第二条の「将来モラロジー研究所において引き続き研究を必要とする諸項目の概要」(廣池、一九二八/一九八六a、序二二九頁)には、遺伝学や進化論、聖人研究、「神」の一部である)人間の肉体と道徳・信仰の関係、またはその価値を問題にする項目もあるが、本章では超越的存在と自然と人間の関係性、すなわち事実関係を対象としているため、価値や行為の問題をも並行して取り扱っているそれらの項目については今後の検討課題としておきたい。
- (77) 廣池自身の言葉では、「神(本体)」がこれに相当する。
- (78) 廣池(一九二八/一九八六b)、三九七―三九八頁。
- (79) 今後は、『道徳科学の論文』第一章以降の記述における超越的存在と自然と人間の関係性、さらに「自然の法則」に従うという「最高道徳」の実行の視点から、廣池及びモラロジーの自然観の研究を総合的に進めていきたい。それらの研究をもとに、「最高道徳」の実行が、地球環境問題を解決するうえで、人類共通の具体的指針になり得るのかどうかを検討しようと思う。

### 参考文献一覧

#### 和文

- 石弘之・安田喜憲・湯浅越男(二〇二二)『新版環境と文明の世界史―人類史20万年の興亡を環境史から学ぶ』、洋泉社。
- 伊東俊太郎(二〇〇八)『創発自己組織系としての自然―モラロジー研究』No.62、モラロジー研究所、ヨコ組―三三四頁。
- 伊東俊太郎(二〇一〇)『「精神革命」と自然の問題―廣池千九郎の意義』『モラロジー研究』No.65、モラロジー研究所、二九―三三九頁。

伊東俊太郎(二〇一一)『「精神革命」の時代と廣池千九郎のモラロジー―残された問題としての『自然』』二〇〇九年モラルサイエンス国際会議報告廣池千九郎の思想と業績―モラロジーへの世界の評価、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、一七―二九頁。

伊東俊太郎(二〇二三)『変容の時代―科学・自然・倫理・公共』、麗澤大学出版会。

岩佐信道(二〇一一)「相互依存のネットワークの中で生きる人間のモラルとしての最高道徳」、二〇〇九年モラルサイエンス国際会議報告廣池千九郎の思想と業績―モラロジーへの世界の評価、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、三二九―三四七頁。

岩佐信道(二〇一三)「相互依存のネットワーク、地球システム倫理そして最高道徳」『モラロジー研究』No.71、モラロジー研究所、ヨコ組二―三八頁。

ウィリアムズ、デヴィッド・ルイス(二〇〇二/二〇一二)『洞窟のなかの心』、港千尋訳、講談社。

大野正英(二〇〇六)「廣池博士の自然観」『廣池千九郎の行迹77篇』、モラロジー研究所出版部編、モラロジー研究所、二三四―二三六頁。

尾関周二「ほか」編著(二〇〇五)『環境思想キーワード』、青木書店。

カウフマン、スチュアート(一九九五/二〇〇八)『自己組織化と進化の論理―宇宙を貫く複雑系の法則』、米沢富美子監訳、筑摩書房(ちくま学芸文庫)。

欠端實(一九九二)「自然的な生き方」『モラロジー研究』No.33、モラロジー研究所、一―三三頁。

カント(二七八五/一九七六)『道徳形而上学原論』、篠田英雄訳、岩

波書店(岩波文庫)。

金聖哲(二〇一七)「廣池千九郎の宇宙自然の法則の現代的意味―環境問題における自己組織化の世界観から」『モラロジー研究』No.80、モラロジー研究所、ヨコ組二二―三七頁。

下程勇吉(一九四六)『存在と意味』、秋田屋。

下程勇吉(二〇〇五)『廣池千九郎の人間学的研究』、モラロジー研究所。

スピノザ(二六七七/二〇一a)『エチカ―倫理学(上)』、畠中尚志訳、岩波書店(岩波文庫)。

スピノザ(二六七七/二〇一b)『エチカ―倫理学(下)』、畠中尚志訳、岩波書店(岩波文庫)。

竹中信介(二〇一八)『世代間倫理』から『継世代倫理』へ―比較文明学・人間学・モラロジーの視点から』『麗澤大学大学院平成二十九年年度博士論文』、麗澤大学大学院言語教育研究科比較文明文化専攻。

立木教夫(一九九六)『廣池千九郎博士がとらえた『自然の法則』―『自然』と『道徳』はいかにかわっているか』『比較文明研究』No.1、比較文明文化研究センター、一二五―一三七頁。

立木教夫(一九九九)『廣池千九郎博士の道徳思想の形―『自然の法則』という言葉の比較構造分析を通して』『モラロジー研究』No.46、モラロジー研究所、一一三六頁。

デネット、ダニエル・C(二〇〇六/二〇一〇)『解明される宗教―進化論的アプローチ』、阿部文彦訳、青土社。

ヒューム、デイヴィッド(一七四〇/二〇一〇)『人間本性論第三巻 道徳について』、伊勢俊彦「ほか」訳、法政大学出版局。

廣池千九郎(一九二八/一九八五a)『新版道徳科学の論文』第七

冊、モラロジー研究所。

廣池千九郎(一九二八/一九八五b)『新版道徳科学の論文』第八冊、モラロジー研究所。

廣池千九郎(一九二八/一九八六a)『新版道徳科学の論文』第一冊、モラロジー研究所。

廣池千九郎(一九二八/一九八六b)『新版道徳科学の論文』第九冊、モラロジー研究所。

廣池千九郎(一九二八/一九八七)『新版道徳科学の論文』第四冊、モラロジー研究所。

松浦勝次郎(一九九二)『自然の法則』について―その働きと進歩―『モラロジー研究』No.36、モラロジー研究所、四九―九二頁。

松浦勝次郎(一九九五)『生命の連絡』と『自然力』の研究』『モラロジー研究』No.41、モラロジー研究所、一三―四七頁。

松浦勝次郎(二〇〇〇a)『現代科学技術と人間・社会―未来へ向けて科学技術をよりよく生かすために』『モラロジー研究』No.47、モラロジー研究所、一一三〇頁。

松浦勝次郎(二〇〇〇b)『環境倫理の基本的課題―自然の生存権の問題を中心に』、『モラロジー研究』No.48、モラロジー研究所、一一三二頁。

水野治太郎(二〇〇八)『経国済民』の学―日本のモラルサイエンス研究ノート』、麗澤大学出版会。

ミズン、ステイブリン(一九九六/一九九八)『心の先史時代』、松浦俊輔「ほか」訳、青土社。

ムア、G・E(一九〇三/二〇一〇)『倫理学原理付録内在的価値の概念/自由概念』、泉谷周三郎「ほか」訳、三和書籍。

目黒章布(一九八三)『廣池博士の自然観』『道徳・教育・経済』、モ

ラロジー研究所研究部編、広池学園出版部、三五―六一頁。  
モラロジー研究所編（二〇〇二）『伝記 廣池千九郎』、モラロジー研究所。

モラロジー研究所出版部編（一九六七）『谷川温泉の由来』、広池学園出版部。

モラロジー研究所出版部編（二〇〇六）『廣池千九郎の行迹77篇』、モラロジー研究所。

ヤンツ、エリッヒ（一九八〇／一九八六）『自己組織化する宇宙―自然・生命・社会の創発的パラダイム』、芹沢高志・内田美恵訳、工作舎。

ラヴロック、J（一九七九／一九八四）『地球生命圏―ガイアの科学』、星川淳訳、工作舎。

ラヴロック、J（一九八八／一九八九）『ガイアの時代―地球生命圏の進化』、星川淳訳、工作舎。

ラヴロック、J（一九九一／二〇〇三）『ガイア―地球は生きていく』、松井孝典日本語版監修・竹田悦子翻訳、産調出版（ガイアブックス）。

ラヴロック、J（二〇〇六）『ガイアの復讐』、秋元勇巳監修・竹村健一訳、中央公論新社。

欧文

Naess, Arne (1989/1990), *Ecology, Community and Lifestyle: Outline of an Ecosophy*, trans. and rev. by David Rothenberg, Cambridge: Cambridge University Press (『ディープ・エコロジーとは何か―エコロジー・共同体・ライフスタイル』、斉藤直輔・開龍美翻訳、文化書房博文社「ヴァリエ叢書」、一九九七年)。

Shape, Eric J. (1975/1986), *Comparative Religion: A History*, Gerald

Duckworth (Second Edition).

付記

本稿は、道徳科学研究センターの「現代倫理道徳研究会」（平成二八年「二〇一六」七月六日）及び「研究センターゼミ」（平成二八年「二〇一六」九月七日）で発表した内容を、筆者の博士論文（平成三〇年「二〇一八」三月受理）の第四章（竹中、二〇一八、一一九―一四六頁）に反映したものがベースになっているが、今回の投稿にあたり、全体を大幅に修正した。

（キーワード：廣池千九郎、自然観、科学と宗教の対話、地球環境問題、自然科学、総合人間学、深遠の信仰は科学と合す、ヒュームの法則、自然主義的誤謬）

